



No.199

ティーブレイク

## Tea Break

テロと袋小路の国

会員 正林 真之

イスラエルの首都は、どこなのか？ これは単純な地理の問題ではない。政治問題も絡む古くて新しい問題であり、単純なようでいて複雑な問題である。イスラエルからすれば、「それは当然に、聖地エルサレムだろう」ということになるが、世界各国からすれば「大使館が置かれている場所」ということで、テルアビブだということになる。もちろん、「古くて新しい問題」というのは、「イスラエルの首都がエルサレムだと言ってしまふと何かと問題が多いので、それはとりあえず棚上げし、テルアビブにしておこう」と考えているところに、とある超大国の大統領が「イスラエルの首都はエルサレムだ」と言ってしまったことで、暗雲が立ち込めるどころか、紛争にまで発展しそうな状況となっているからである。

イスラエルに着くと、まず空港での質問が半端ない。「観光で来た」と答えてしまい、その先を尋ねられて、訪問先に会社が多かったりすると、「本当に観光か?!」と疑われ、「実は、ビジネスできた」と言えば、「どうして嘘をついたのか?!」と指摘される。通常の国では考えられない執拗さである。これに加えてイスラエルでは、地政学上の問題から、アラブ人の場合には入国管理官から通常よりも厳しく質問を受けることになるので、アラブ人の後ろに並んでしまうと、これまた時間がかかる。

ちなみに、イスラエル在住の10%程度はアラブ人で、その割合は年々増え続けている。ここで、「なぜイスラエルに、戦争相手国の民族であるアラブ人が居るのか」と不思議に思われる方も居られると思うが、それは、日本に国交が無い北朝鮮籍の住人がいるのと同じような事情である。

入国の印鑑は、パスポートとは別の用紙に押してくれる。それは、もしイスラエルに入国したことの証拠がパ

スポーツ上に残ってしまうと、それだけで入国拒否される国（アラブ諸国を中心とした一連の国々）が存在することから、気を遣ってくれているのである。

イスラエルに行くには、なるべく若いときが良いだろう。それは、空襲警報が鳴ると、2分以内にシェルター内に避難しなければならないので、足腰が弱いと逃げ切れなくなるからである。実際、イスラエルには超高層ビルは存在せず、非常階段で降りたときに2分以内に地下のシェルターに逃げ切れる階数に抑えられている。ちなみに、「2分」というのは、ガザ地区から発射されたミサイルがテルアビブに到達するまでの時間である。ただ実際には、優秀な迎撃ミサイルが迎撃してくれるので、テルアビブが大きな被害に見舞われたことは無いようである。

これがもし日本なら、「もう大丈夫だろう」という感じで、建物の避難訓練と同様、警報に対しても無視を決め込む者も出てきそうであるが、そうはならない。ここは、完全に男女平等であり、男女を問わず、兵役が3年間課せられている。そこで仕込まれたものなので、「無視をする」などということは起こらない。しかも、「周囲を全て敵に囲まれている」「しかも、いつ何時にどのように襲われるか分からない」ということで、まさに「油断大敵」が浸透しており、何かと緊張感が漂っている国である。

では、そういった国から見て、日本という国はどう映るのだろうか。実は、イスラエルから見た日本というのは、「テロの国」という解釈が存在する。読み間違えた人もいるかもしれないので、もう一度念のために言っておくと、日本から見たイスラエルが「テロの国」なので

はない。イスラエルから見た日本が、まさに「テロの国」だったりするのである。「平和ボケしている国」という答えを期待しておられた方には誠に申し訳ないが、これが現実である。

では、なぜそのように思われるのかというと、実は過去に、日本赤軍がテルアビブ空港で銃を乱射した事件があって、その記憶はまだ失われていないからである。また、日本には、「地下鉄サリン事件」のようなものもあった。むろん、初対面の際にそれを直接言われたりすることはさすがにないが、ちょっと親しくなるとこういった話をすると、我が国がイスラエル人の一部からは根強く「テロの国」と思われているという話を聞くことができるし、気の利いた旅行ガイドブックには、「イスラエル人は必ずしも親日ではない」という注意書きのトーンでそのエピソードが掲載されていたりするのである。

けれども、こういったイスラエルと日本の共通点というのは、「国土も狭く、資源も無い」ということで、知恵や知識というものを重視しなければならないという事情があることである。したがって、両民族ともに、識字率や知能指数が高いというような評判もある。また、ともに賢い民族であるという点では、定評があるようである。そしてまた、知恵や知識というものに根差した知財。この知財を重視して行こうとしている姿勢も同じである。

しかしながら、日本との大きな違いは、ヨルダン商人やパレスチナ商人といった優れた商人たちと陸続きで隣接しており、それらに伍して戦っていかねばならないという宿命があることである。そしてその宿命が、必然的

に「最強の商人」を作り上げ、イスラエル人の「売れるものは、何でも売る」という気概を生むことになったのである。勿論、知財も、売れるものは売る。なので、知財流通も盛んである。そしてまた、イスラエリードリームというのは、アメリカンドリームを達成した者に、自分の事業や知財を高く買ってもらうことであったりするのである。

知財も含めて、売れるものは売る。ベンチャーの立ち上げはもちろんのこと、知財流通も盛ん。こんな彼らに伍していかねばならないとも意気込むのであるが、現時点では彼らにライバル視されていないどころか、警戒すらされていない。もちろん、「知財テロ」として忌み嫌われているわけではないからそれでよしとしようという考えもできようが、それはそれであまりにも寂しいではないか。

ところで、イスラエルと言えば死海（Dead Sea）が有名であるが、ここには流れ込む川（ヨルダン川）はあっても、この湖から流れ出す川は無い。この「出口の無い」状態となっているから、塩分が溜まりに溜まることとなってしまい、最終的には何もかも住めない死の湖となってしまったわけである。そう、“死海”というのは、全く出口の無い湖なのだ。この国の人たちは、出口の無い流れというものが最終的にどのような結末を迎えることになるのか、現実に目の前にある景色を通じて、知り過ぎるくらいによく知っている。けれどもそこは、観光地であり、余暇を楽しむ人々が訪れる場所である。死海の塩水に浮かびながら寛ぐのは極めて快適であるが、迂闊にも口に入った死海の水は、想像したものよりも、はるかに塩辛く、とても苦いものであった。